

論文題目 価値共創によるイノベーション機会創出の研究

氏名 岩崎博論

論文内容の要旨

本研究は、イノベーション機会創出の方法論として価値共創に焦点を当て、既存の価値共創理論の問題点を明らかにし、その問題点を克服するための新しい理論フレームワークを提示することを目的とする。

第1章では、イノベーション機会創出における価値共創の重要性の高まりを起点とする本研究の問題意識が提示された上で、研究の目的、研究の構成が示された。

第2章では、価値共創の先行研究のレビューを行った。価値共創は、イノベーション論、マーケティング論、アントレプレナーシップ論、組織論などの広範囲の領域においてこれまで議論されてきた。本論文では、先行研究の中から Vargo & Lusch のサービス・ドミナント・ロジック (S-D ロジック) に焦点を当て、S-D ロジックの価値共創の理論の課題と問題点を指摘した。

第3章では、第2章で検討した先行理論の課題を克服するための、理論フレームワークを提示した。その上で、この理論フレームワークを用いた価値共創理論の発展可能性について論じた。本研究では、Deleuze & Guattari によるアレンジメント概念を基軸に価値共創の新しい理論フレームワークを提示した。

第4章では、第3章で導入した理論フレームワークを例示するための研究方法について論じた。本研究では、企業 S の製品 M の製品開発から市場導入までのプロセスを事例研究の対象とした。事例研究のデータソースとして、二次資料やインタビュー、参与観察などの方法論を組み合わせた。

第5章から第7章において事例研究を行った。第5章では事例研究の対象となった製品 M の開発から市場導入までのプロセスを詳細に記述した。続く、第6章と第7章では、第3章で提示した理論フレームワークの二つの論点について、製品 M の事例から関連する箇所さらに焦点を当て、理論フレームワークの適用可能性について論じた。

第8章では、ディスカッションとして、事例研究による理論フレームワークの例示を通じて発見されたことを整理し、価値共創理論への貢献と実務への貢献を論じた。最後に、第9章では、終章として本研究全体の要約を掲載するとともに、本研究の限界と今後の研究課題について述べた。

本研究の理論的貢献は、アレンジメントのアプローチが、S-D ロジックの制度概念導入による非予測的アプローチとの矛盾を解決することを明らかにしたことである。アレンジメントによる相互作用は偶発的であり、偶発的な関係性から非予測的な価値が生まれ、価値共創によるイノベーション機会の創出が可能になることが示された。